

## 尊勝寺と六勝寺

平安時代の後期、藤原道長・頼通の摂関政治の栄華が去り、「院政」の時代にはいります。律令制では本来、天皇が政治を行います。院政では天皇譲位後の上皇が実権を握って政治をおこなうようになります。この院政の時代を代表するのが白河上皇です。白河上皇は延久4（1072）年に即位し、在位14年の後、位を譲り、43年間院政を敷きました。永長元（1096）年に出家して法皇になります。

白河上皇のことばに、「賀茂川の水、双六の賽、山法師、是ぞ朕が心に遵（したが）わぬ者」（『源平盛衰記』）とあります。

木材を伐採することで森林が荒廃し、賀茂川の洪水がたびかさなったり、双六に代表される博打が横行し、僧侶の乱逆など、安定しない都の状況でした。ちょうど、律令政治が衰退し、貴族から武家の時代に替わる過渡期の頃でした。

白河上皇は、不安定な都を離れ、応徳3（1086）年に、平安京の南に遷都したかのような御所鳥羽殿（南殿・北殿）を新たにかまえ、続く鳥羽上皇は御所の造営を続け院庁として整備しました。

白河上皇はこの離宮で天皇に代わって上皇（院）が政治の中心



尊勝寺の観音堂遺構

となる院政を敷きました。それに先だって、洛東の白河（現在の京都市左京区岡崎）の地は貴族の別荘地として開発が進められていましたが、この地に白河天皇は「国王の氏寺」である御願寺（法勝寺）<sup>ほっしょうじ</sup>を造営しまし

た。

法勝寺は承保2（1075）年に造営を始め、承暦元（1077）年に落慶法要がおこなわれました。以後、岡崎の地には尊勝寺（堀川天皇）、最勝寺（鳥羽天皇）、円勝寺（鳥羽天皇皇后待賢門院璋子）、成勝寺（崇徳天皇）、延勝寺（近衛天皇）とおおよそ70年間間に、歴代天皇の発願によって造営された御願寺が6か寺建立されました。寺の名にいずれも「勝」の字をもつことから、「六勝寺」と総称されていました。

発掘調査成果によると、法勝寺は東西幅二町（約240m）、南北幅二町ないし三町（約360m）と広大な寺域をもち、その中央には東西56m、南北30mと推定される壇状の高まりがあり、その壇の上に金堂が建てられ、金堂の南西約100mには園池が造られていました。金堂の南には高さ約80mとされる八角九重塔が建てられました。近年では、八角九重塔跡の調査で、大規模な地業跡や九重塔を示すと見られる「九」の文字や、塔の本尊「大日如来」を意味する梵字が書かれた軒瓦の破片が見つっています。

尊勝寺の調査では、礎石建物跡と基壇、雨落ち溝、瓦溜まりが見つかりました。建物は東西6間（21.6m）×南北2間（7.2m）の規模で、身舎の周囲には二重に庇を巡らせており、東西約33m×南北約19.2mの巨大な建物であったことがわかりました。

鎌倉時代の文献『中右記』によると、6体の観音像を納めた観音堂が出てきます。発掘調査で見つかった建物は、東西6間と観音像の数と一致したもので、観音堂と推定されます。



（竹原一彦）

観音堂正面の石敷きと礎石（尊勝寺跡）